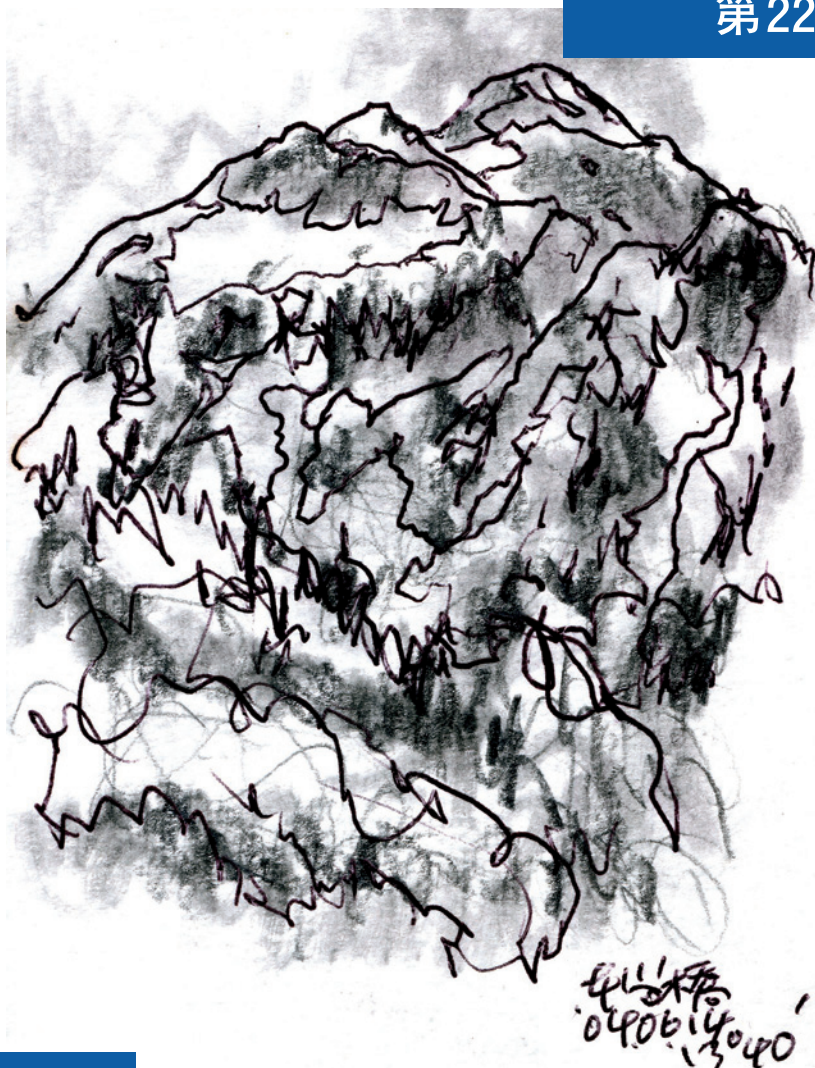


山岳科学総合研究所 ニュースレター

2010年 9月
第22号



Contents

「涸沢談話会（第9回上高地談話会）」特集・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2～7

小屋番の使命—登山道整備と遭難救助—

涸沢ヒュッテ代表 山口 孝

涸沢の雪が語ること

山岳科学総合研究所長 鈴木 啓助

涸沢談話会に参加して—上高地・穂高大好き人間の極めて私的な参加記—

日本山岳文化学会事務局長 酒井 國光

上高地からの一步

草 深 恵

広報・コラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

2010年度「信州フィールド科学賞」選考結果について

10月9日（土）開催 第10回上高地談話会のお知らせ

研究所 行事日誌（2010年7月～8月）

表紙の絵：「北穂高岳」本谷橋から

中信森林管理署上高地森林事務所 宗 亭 正 治

小屋番の使命—登山道整備と遭難救助—

涸沢ヒュッテ代表
山 口 孝



1 はじめに—小屋番のしごと

皆さん、涸沢ヒュッテへおいでいただき、ありがとうございました。今日（7月7日）はたまたまいい天気恵まれましたけど、梅雨の時期はお客さんが少なくて小屋番は何をやっているか



当日の講演風景

って、疑問に思う人がおられるんですね。優雅にのんびりやっているんじゃないかと。実はこの時期はやったらきりが無い仕事がいっぱいあるんです。山小屋の仕事って、本当にとにかくこの時期が大変なんです。お客様が来られただけできないことをやるんです。登山者が来たら、朝から晩まで登山者の世話で追われちゃって、とてもほかのことはできない。今日はまずそんな時期の仕事のことからお話します。

2 小屋を守る

うちは、11月から4月の5か月間、小屋開けまでの5か月間は閉めるんですよ。この場所は「雪崩の通り道の1丁目1番地」と私はよく言うんですけど、すごいところなんです。

雪崩から建物を守るために、小屋のまわりには石垣があります。たぶん建物よりも石垣のほうがお金がかかっていると思います。すべてヘリコプターと人力で私が積み上げました。

それから、小屋の建物を守るために、冬囲いにべらぼうな材木を使っているんです。それと、小屋のまわりにあるものは、外の売店から何から全部撤去します。撤去の作業には、10人で10日から2週間ぐらいかかっちゃうんですね。皆さんにさっき休んでいただいたテラスも全部かたづけます。その材も冬囲いになります。

建物の中には全部つかえを入れているんですが、つかえだけでだいたい300本ぐらい入れます。

そうして、この涸沢ヒュッテを雪崩から守る。ドームのような形にする。そうすると雪崩がきても上にあがって行っちゃう。屋根の^{ひし}庇とか出っぱりとかがなるべくないようにして、5か月間守るといってか耐えてもらう。

毎年ひと冬越すと、やっぱり建物があちこち傷むんです。それをこの時期に修理しなければいけない。それだ

けでもすごく忙しいんですね。

3 登山道の手入れ

今日は皆さん本谷まではだいたいスムーズに來られたかと思いますが、そこから上が一気に上がるんですね。昔から新人殺しとかいろいろな名前があるんですが、七曲がりぐらいカーブがあります。三曲がり、四曲がりと一緒に高度を稼いでいくんです。ずっと上がって行って、最後に折り返すところが肛門岩っていう岩。そこで折り返してちょっと行くと、やっと平らになって、前穂が見えます。そこまでの急登がちょっとえらいですね。それからSガレと言ってヒュッテが見えるところまでがゆっくり行って30分から1時間くらい。毎年、残雪のあるときにはわかりやすいようにステップを切り、赤い粉（ベニガラ）でマーキングしています。チョークの粉みたいなものを撒いて、ここを歩きなさいということなんです。

涸沢には、日帰りの人も入れて年間に10万近い人が登ってくるんですね。その人たちが登り下りすると、道がものすごく傷みます。冬の間にも崩れたりして傷む。本谷の上に石畳になっているところがありますが、この道はほとんど私が長い年数をかけて手入れしてきました。今でも毎日のように手入れしています。上り下りのたびに、ちょこちょこ気になったところを直すんです。



石畳の登山道

こうした手入れは、我々としては、皆さんが使う道というより、我々の通勤路だと思ってやっています。愛着があるというか、登山道という認識よりも我々の大事な生活の道だということを肝において守っているんですね。こういう道直しに補助金を出せとか金をよこせとか言う人が中にはいますけど、私はそれは自分たちの山小屋の道だから自分でやりなさいよ、と思います。

小屋番の男衆には、道直しというのは山小屋の仕事の基本で、この仕事ができなかったら小屋番としての資格はない、というふうに言っています。

4 ボッカ

なぜ登山道をそんなにきれいにしたかというのと、昔は全部ボッカで荷上げをしたからなんです。今でこそヘリ

コプターで荷上げをしています。私が若いころ、今私は62歳ですけど、今から30年ほど前、1980年ごろまではヘリコプターがなかったんです。全部ボッカです。

皆さんボッカっていうのは実際に見たことないと思うのですが、歩く荷と書いて歩荷（ボッカ）です。背負子（しよいこ）と言う梯子みたいなやつ、これも全部自分で作るんですけど、それに縄まいて肩縄つけてね、それに全部背負ってくるんです。その当時は横尾まで軽トラックで入れるようになっていたので、そこから毎日のように荷上げしました。その日の食糧はその日の午前中に行って、昼ごろまでに持ってくる。それを、私たちは夏じゅう毎日、30日間やりました。

30日間毎日やると、もう横尾までの上り下りの道で右足左足を置くのが全部いっしょなんです。そうすると何か異変があると全部気がつく。わかるわけです。そういえばこの石1個邪魔なやつがあるとか。それで、毎日上り下りする道は当然直さなければいけないわけです。

あとで遭難救助の話もしますが、そういうふうにして鍛えられました。私ども10人ぐらいでボッカに行くと、1人60kg 平均で600kg ぐらい。今ヘリで荷上げするときは1回が600kg なんです。ヘリと同じ分量が1回で私たちも背負って来られる。ヘリはそのあとに来たんですが、当時はそんなに技術がなかったんで、ちょっと天気が悪かったら飛ばなかったんですね。私たちはおにぎり2個あれば雨が降ろうが槍が降ろうが登れるよと、平気で本当にヘリと勝負していました。そのおかげで私は人を背負うことができるようになりました。

5 遭難救助

私たち小屋番が遭難救助に出るときは、救助隊として行くわけなんで、やっぱり気持ちも全部変える。チャンネルチェンジして行きます。「助けに来ました」って言って「えっあなたが助けにきたの？」って言われても困るので、こっちが、あなたの命預かります、みたいな感じで行かないと、その人は命を預けられない。私たちはさっき話したように毎日背負っているから、背負うことに関しては自信があるわけです。だから、背負われたらわかるんだね。若い人や慣れていない人が背負うと怪我人が怖がってしまう。

私は今までに300回ぐらいレスキューに行っています。私の背中で亡くなった方もいますし、いろんな方が大勢いるんですけども、やっぱり山では死んじやいかんと思っています。ただ、やっぱり亡くなったり、怪我したりするところはやばいんですね。そこへ俺たちが助けに行くともっとやばいわけです。1回だけ、遺体を収容できずに敗退したこともありました。

本当にいろいろな事故も見えてきたし、いろいろな搜索もやってきましたけど、悲しいのはやっぱり二重遭難で小屋番を亡くしたことです。思い出に残るレスキューと言うと、平成14年（2002年）11月の大雪のとき。

そのときは、冬囲いの作業をしていて外を見たら、雪渓にいたスキーヤーが誰もいない。表層雪崩で埋まったんですね。それで、何とか20人助けて、1人はまだ見つからないというところへ、別の男の人が雪崩の中から自力で出てきて、なんとか彼女を助けてくれて。その人たちはアベックでテレマークのスキーをやっていて、同じ雪崩で埋まったんです。それで、小屋番が二重遭難覚悟で搜索して、6時間も雪に埋まっていた女性を救出しました。気絶していたところをゾンデで突つかれて目が覚めたんですね。

そのあと2人は結婚して、山が好きで毎年ここへ来ていたんですけど、この間お手紙をいただいて、子どもができました、山口さんたちに助けていただいた命のおかげで第二の生命ができました、ということで、ほんとうにうれしかぎりでした。人命救助の冥利に尽きたなど。

私どもはここにいるからこそそういう場面に立ち会える。非常に貴重な経験ですね。普通の仕事をやっている人は、こういう場に会えないですね。もうそれは非常に感動的です。良きにつけ、悪きにつけ。

ひとの命を救うということは、自分の持っているもの以上のものを出さないと絶対に救えない、ということを私は肝に銘じています。それにはやっぱり自分に体力がなければいけない。それから、自分の得意技を覚えていく、身につける。それで徐々に現場へ行って、ここはこうなっているんだとか、こういうところはどうやってやったら人が救えるのかな、この場面なら何時ごろにヘリを呼べるかなという段取りを想定したりします。

やっぱり装備は十分持って行かなければいけません。どんな遭難でも絶対に甘く見ない。どんな救助でも絶対フル装備で行って、ピバークしても大丈夫なような用意はしていきます。いろいろと道具はありますが、必要なものは全部持って行きます。どんな遭難でもフル装備で行け、というふうに、うちの小屋番にも伝えてあります。うちの小屋番も男衆はほとんど救助隊員になっています。毎年事故がありますから、その前にここで訓練したりもしています。まあここで仕事すること自体が訓練のようなものですからね。道直しにしても、荷物担ぎにしても、皆さんを案内することにしても、日々ここで生活すること自体を通して、山に精通する技術が身に着くんじやないかと思っています。

6 おわりに

涸沢は、日本の山を愛する人たちの一番の聖地なんですね。日本にはこれだけすばらしい場所はありません。なぜここに涸沢ヒュッテを造ったかということ、穂高の山を見るために造ったんです。ぜひまた出かけてきていただければと思います。



涸沢ヒュッテと穂高連峰

* 当日ご講演いただいた内容を編集部でまとめました。

涸沢の雪が語ること

山岳科学総合研究所長
鈴木 啓 助



空から降ってくる雪の結晶の形は千差万別だが、降ってくる時の条件に規則性があるのだろうか。この疑問に、シンプルな実験装置から答えを導き出したのが中谷宇吉郎である。中谷は、温度と水蒸気量を自由に変えることができるガラスの筒の中で、雪の結晶を成長させることに成功した。様々な条件での実験を繰り返して、雪の結晶形は、結晶が成長する時の温度と水蒸気の量で決まるという中谷ダイアグラムを完成させた。中谷はこの実験の苦労話や自然のしくみについてを岩波新書赤版の「雪」（現在は岩波文庫「雪」として復刻されている）にまとめている。中谷ダイアグラムによれば、樹枝状結晶は、マイナス15℃前後の温度で水蒸気量が比較的多い時に成長するし、角柱結晶はマイナス10℃からマイナス20℃ぐらいの温度で水蒸気量が比較的小さい時に成長する。中谷ダイアグラムは、実験室で温度と水蒸気量を自由に変えることにより、様々な雪結晶ができることを示したが、逆に言えば、地上で雪の結晶形を観察することにより雪結晶が成長した雲の中の気温や水蒸気量がわかることになる。このことを、中谷は「雪は天から送られた手紙である」と表現した。

中谷は、雪の結晶形から上空の気温や水蒸気量を読み解くことができたが、雪には他にも手紙文が書かれているはずである。たとえば、降ってくる雪をみていると、写真集で見られるような綺麗な雪結晶ばかりではなく、たくさんの雲粒が付いた雲粒付結晶もある。その雲粒が、時には少なくある時には雪結晶にびっしりと付いていたりする。このことから何が読み解けるのだろうか。

降ってくる雪は真っ白でとても綺麗だが、雪は大気の掃除屋でもあるので、空から小さな塵や埃などを集めて降ってくる。綺麗な六角形の雪結晶は、中心にある氷晶核以外は純粋な水が凍ったもので化学的にもほとんど「純水」である。一方、大気中には、海上での波しぶきから生成された海塩粒子や岩石・土壌起源の微細な粒子、人間活動によって放出された窒素酸化物や硫黄酸化物などがエアロゾルとなって浮遊している。綺麗な雪結晶にエアロゾルがたくさん付くと、ニキビ面のような雪の結晶になる。このような雲粒付雪結晶は、雲粒の種類によって様々な化学的性質を示す。海塩粒子がたくさん付いた雪結晶は塩分濃度が高くなるし、窒素酸化物や硫黄酸化物が付着した雪結晶は酸性雪となる。

札幌と十日町で、降ってくる雪を採取して雪に含まれるイオン濃度を測定した。すると、海塩成分であるナトリウム・イオン濃度が高い場合と低い場合があり、濃度が高い時は西高東低の冬型の気圧配置による積雲からの降雪であった。また、濃度が低い時の降雪は低気圧前面の層雲からであることから、降雪中の塩分濃度は雪雲の対流の度合いと関係があるのではないかと考えた。雪雲の対流の度合いとして対流混合層の高さを計算し、ナトリウム・イオン濃度との関係を示したのが図1である。札幌でも十日町でも、対流混合層が高く積雲対流が活発であると、その雲から降る雪の塩分濃度が高くなることがわかる。これは、積雲対流が活発だと雪結晶と海塩成分を含んだ雲粒が衝突しやすくなり、雪結晶にたくさんの雲粒が付着するためである。では、同じ対流混合層の高さでも札幌よりも十日町の方が降雪中のナトリウム・イオン濃度が高くなるのはなぜだろうか。冬型の気圧配置時には、大陸から吹き出した寒冷乾燥な空気が日本海上で熱と水蒸気の補給を受けて積雲となる。風上側（北西方向）の日本海の幅が、十日町のほうが札幌よりも広いために、積雲対流の継続時間が十日町の方が長くなる。このために、同じ対流混合層の高さにもかかわらず、十日町の方が札幌よりも降雪中のナトリウム・イオン濃度が高くなるのである。これらのことから、降ってくる雪の塩分濃度を調べることで雪雲の対流活動の度合いがわかることになる。これもまさに「雪は天から送られた手紙」を読み解いたことになる。

また、西高東低の冬型の気圧配置時に降る雪は海塩成

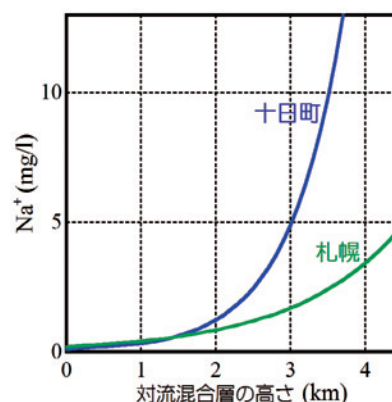


図1 札幌と十日町における降雪中のナトリウム・イオン濃度と雪雲の対流の強さの関係

分が主であり酸性物質の割合は比較的少ない。一方、南岸低気圧や日本海低気圧の前面での降雪では、酸性物質の割合が大きくなり海塩成分は少なくなる（図2）。

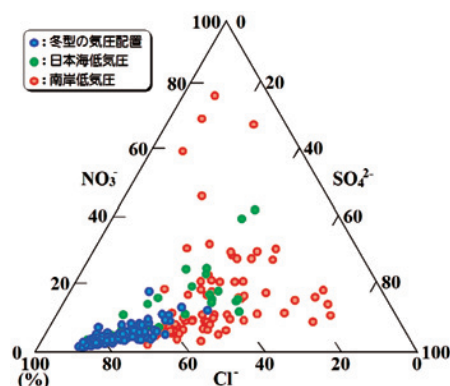


図2 降雪時の気象条件による十日町市での降雪中の陰イオン組成の差異

このように、降ってくる雪には様々な文章（情報）が書き込まれている。そしてそれらが順番に積雪として地上に堆積していく。次に、このことを利用して、これまで不明となっていた高標高地点での冬季降水量を見積もる新しい手法を紹介する。

わが国の脊梁山脈には、世界的にも稀なほどの大量の雪が堆積し、春になるとともにそれが融け、貴重な水資源となっている。しかしながら、実際に、どれほどの雪が山岳地域に降っているのかを量的に議論することはきわめて困難である。高標高地点での積雪深観測はほとんど行われておらず、継続的に観測され公表されている気象庁の積雪深観測所の最高地点は奥日光の1292 mに過ぎない。標高1000 m以上でも、菅平、草津、阿蘇山、開田高原の4地点を加えた5ヶ所に過ぎない。このような状況では、山岳地域における積雪深の経年変動はおろか冬季降水量の量的な議論すらできない。そのため、山岳地域における冬季降水量の見積もりは、流域単位で河川の流出高から算定したり、衛星や航空機によって積雪深を測定しそれから降水量を算定したりすることによりなされている。これらの方法では、冬季降水量の、それぞれ空間分布や時間分布が不明であったり、乗り越えるべき課題が多い。

そこで、降ってくる雪に書き込まれた情報を使った新しい手法は以下の通りである。降雪とともに沈着した化学物質は、融雪がなければ堆積した層に保存されるということが、本手法の基本原則である。中部山岳地域の冬季には、北西季節風に乗って黄砂が運ばれてきたり、海塩成分が雪とともに降ったり、さらには、南岸低気圧によって、わが国の中部以西の都市域からの人為起源物質が運ばれてくることもある。融雪が始まる前の山岳地域の積雪中には、これらの化学物質が保存されている。つまり、積雪を掘削し、積雪層を詳細に調査すれば、初冬から掘削時までの湿性および乾性沈着物が時系列的に復元できることになる。これら積雪層の特徴的な層位に堆積

時の日付を入れることができれば、上下のふたつの層位間の積雪水量は、その間の降水量に相当することになる。

ここでは、涸沢での研究事例を紹介する。涸沢カールの標高2320 m付近において、2008年4月19日に表面から303 cm 深までの積雪を掘削し、層位を観察した後、雪温・密度を観測し、深度3 cm ごとに積雪層を採取した。それらを化学分析した結果、ふたつの明瞭な黄砂層が認められた。これらは、それぞれ2008年3月3日および3月17日から18日にかけての黄砂による層であると考えられる。さらに、氷板が形成された層は暖気が侵入した際のものであると考えられるし、海塩成分のピークは冬型の気圧配置時の降雪に相当することが考えられる。このように、積雪層の複数の深度に堆積時の日付を入れることができる。密度の測定結果から上下ふたつの層位間の積雪水量を算出することができる。融雪によって積雪層から水が流出していないとすれば、この積雪水量はふたつの日付間の降水量であると考えて良いことになる。残念ながら毎日の降水量まで算出することはできないが、少なくとも、標高2320 mでの期間降水量を算出できることになる。本手法による降水量算定の妥当性を検討するために、気象庁によって観測されている地点での同期間降水量との相関を計算した。涸沢に最も近い観測点のアメダス上高地での観測値との相関係数は0.73である。それなりに高い値であるが、他の観測地点との関係はどうなのだろうかと考えて、図3に示すように各地点との相関係数を計算した。その結果、上市（富山県）との相関係数が最も高く、次いで神岡（岐阜県）との間の値が高い。ふたつの地点とも涸沢から見て北西の方向にある。涸沢では冬型の気圧配置時に多くの降雪があり、さらに稜線の東（風下）側に位置することによる吹きだまり効果で多量の積雪が観測されることから、上市や神岡での降水量と涸沢での積雪水量との相関係数が高くなるのは理解しやすい。冬季には南岸低気圧による降水の多い松本や穂高との相関係数が低いのも納得できる。

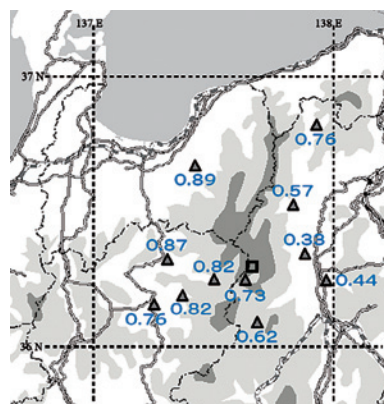


図3 涸沢における積雪水量と各地点における期間降水量との相関係数

雪にはまだまだ多くの文章（情報）が秘められている。それらを読み解く作業をわくわくしながら今後も続けていきたい。

涸沢談話会に参加して

—上高地・穂高大好き人間の極めて私的な参加記—



日本山岳文化学会事務局長

酒 井 國 光

数年前の上高地開山式でのことだった。「山溪の山口さんですか」との問いに「いや違います。涸沢ヒュッテの山口です。よく間違えられるんですよ」との返事。(似た人がいるものだな…)と、思い続けていた。その山口さんの話が聞ける。案内を手にした日すぐに、参加希望のメールを入れた。

荷揚げの苦労話、小屋番の使命としての登山道整備・遭難救助など、山口さんの話に聞き惚れながら、もしかしてこの人は『岳』の「ヒュッテの山口さん」ではなく「主人公・島崎三步」そのものではないかと、マンガの世界にまで想いを巡らせてしまった。

「涸沢の雪が語ること」、この講話には更に強い関心があり、今回の参加となった。これには次のような苦い経験がある。

1966年1月1日、午前10時50分、北穂高岳東稜に取り付くべく登高中の8人パーティーに新雪雪崩が襲い掛かり、二名の尊い命が奪われた。先発隊のリーダーとして北穂頂上までテントを上げていた私は、「俺が引いたルートで…」と、慙愧の念に苛まれた。遺体は梅雨の時期まで発見が遅れた。学生であった私は涸沢ヒュッテに泊まり込み、パトロールを続けた。

二人の慰霊碑はヒュッテのテラスとほぼ同高度の東稜末端の岩に設置してある。これに詣でるのは私の仕事と心得ている。

鈴木先生のお話は涸沢での三年間の成果に留まらず、学生時代から続く研究結果からの知見を分りやすく説明していただいたもの。「こういう話を50年前に聞いていたら…」と、山で「たら、れば」は無いことは十分知りつつも、ついつい考えてしまったのだった。

それにしても何と言う天候に恵まれた二日間だったのだろうか。往路は案内氏の植物などの説明に耳を傾け、復路は今回知り合いになった数人と語らいながらの充実した山行であった。

講師の先生方、談話会を企画運営していただいた信州大学山岳科学総合研究所の方々、涸沢ヒュッテのスタッフの皆様に感謝いたします。来年以降もこのような大自然に囲まれた場所での談話会を期待しています。

次に、上高地・穂高大好き人間の讃歌を、昭和山岳会70周年記念誌『多様な登山観のなかで』から紹介する。

穂高落穂拾いの記

ここ5～6年、よく上高地に出かける。今年(2008年)も開山式前日から9日間行っていた。定宿は小梨平。朝は小鳥の囀りで目覚める。横になったまま鶯の美声に聞き惚れる。カーテンを開けると、カラマツ越しに真っ白に雪を纏った岳沢を囲む山々。しばし見とれる。

朝霜の降りた河童橋へ。梓川辺りのケショウヤナギは朝霧に煙り、清流は足下へ流れ込む。奥穂、西穂の雪面は朝日に輝き、岳沢には明神の影が大きい。焼岳は静かに噴煙を上げて佇む。まだ観光客は来ない。天地創造の神の最高傑作「上高地」独占だ。一昨年程ではないが、今年も残雪が多かった。それを利用して、涸沢へ、徳本峠へ、岳沢へと歩き回る。

五月下旬、ニリンソウを求めて、明神池畔嘉門次小屋に宿をとる。ここの朝はカッコーの声で目覚める。耳を澄ますと「カッコー」「カッコー」が遠く近く林間を渡ってくる。

早朝の明神池は正に神御座します幽玄郷だ。鏡のような池面に明神の山肌、新緑の樹々が倒影し実に美しい。写真に、スケッチに(こちら妻)、朝食前のひと時我を忘れる。ニリンソウの最大のスポットは徳沢園。真昼、「カー」と花びらを先端まで力一杯広げた時が見頃だ。

六月下旬、梅雨の上高地も良いだろうと出かける。幸か不幸か昨年も今年も嘘みたいな上天気。焼岳の頂上まで至福のひと時を過ぎてしまった。更に、夜は定宿のスタッフ一同との宴会。山にも人にも満足満足。

実は最近の上高地行は、私にとって「穂高落穂拾い」なのだ。昭和40年代前半、夏冬と足繁く穂高へ通った。そこには「滝谷」があった。当然のこととして上高地など素通りだった。結果的にそんなに数多くは登っていないが、「我が青春は厳冬期の滝谷にあり」とさえ思っていた。1971年度の冬に初期の目的「滝谷末端から第二尾根を経て奥穂高岳往復」を達成し(『岳人』305号)、以降「黒部川流域の山々」へ、のめり込んで行った。

フランスの作家アナトール・フランス曰く「もし私が神様なら青春を人生最後の部分におくだろう」と。けだし名言。

そうだ、私も言おう。「我が(晩年の)青春は上高地にあり」と。

上高地からの一步



草 深 恵

上高地バスターミナルに降り立ち、これから向かう山々を確認すると、雲間から青空が覗き、期待がワクワクと高まってきた。

まずは、参加者の確認と挨拶があり準備体操を済ませ出発となった。顔見知りの参加者が大半を占め、ちょっと場違いかとも思いつつ、自然や人との新たな出会いを楽しみに歩き始めた。いつものように清水川の清らかな流れを渡りしばらくすると、木の上からは野猿が私たち一行を出迎えてくれた。

木洩れ日の中歩いて行くとまずは明神岳、続いて梓川の爽やかな川風を受けながら進むと前穂高岳がその雄大な姿を見せてくれた。昨年は工事中で河原の迂回路を歩いたと思いだしながら落石注意の下を足早に過ぎると、屏風岩が見え始め横尾に着いた。その頃には他の参加者の方々と話を交わしながらの山行となっていた。

横尾大橋を渡ると本格的な山歩きが始まる。屏風岩の滝を眺め、本谷橋下の急流からマイナスイオンを吸収すると俄然山モードとなった。急登を半分程過ぎた辺りで山桜が咲き、可憐なその姿は遅い山の春の訪れを感じさせてくれた。今回の目的地である涸沢に辿り着くと、まだそこは雪多く残る冬景色だった。穂高連峰に囲まれ、同じ様に汗をかいた方々と味わうビールは格別であった。

七夕の夜の涸沢談話会では、多くの人が見えない部分で私たちの山行を安全に楽しくできるように支えてくれている事に感銘を受け、加えて私には同じ様に見える雪が様々なことを語ってくれている事に驚かされた。

翌日、梅雨の時期とは思えない位の眩しい青空の下には、白く光る残雪が半分程を占めていたが、その反面雪解けが進んでいる山肌には新緑が広がっていた。この言葉にはできない感動の景色を拙いながらも描いてみた。刻々と変化していく山の表情を汲み取ろうとする過程は、山と会話している気分になり、私にとって何とも言えず幸せなひと時であった。

天気の良い日の下山は後ろ髪を引かれる。雪渓を滑らないように慎重に歩を進

めた後、登りで見落とした花々や、山の頂を再発見し写真に収めながら下って行った。来た道を振り返りながら「あんなに汗をかきながら登ったのに、あっという間だった…」と思うのは本谷橋までの話。標高が低くなるにつれ、考えることは現実的（徳沢に着いたらソフトクリームを食べ、山を下りたら温泉に入ると…）となり、足の疲れに負けないようにと思っているうちにゴールへ到着、というのはいつも通りであった。

帰りの横尾から上高地の約3時間の道のりは「長いなあ」と感じてしまう。登山口の間際まで車で入っての山登りに慣れてしまっているため、この行程が無かったらもっと楽に山の頂へ登れるのではないかと正直思ってしまう。長い行程を経ても穂高連峰や槍ヶ岳を黙々と目指すのはもちろん目的とする山への憧れが一番にあるのだが、上高地の自然に触れながらの3時間が無く身近になり過ぎてしまったら、同じ様な感動が得られるのかと考えてしまう。

上高地からの一步があるから、自然や人との出会い、スケッチが私にとって宝物となり、帰り道に次の山行計画を立ててしまうのであろう。

改めて、今回の山行主催者・参加者の方々に御礼申し上げます。



2010年度「信州フィールド科学賞」選考結果について

2010年度「信州フィールド科学賞」について、選考委員会において厳正な審査を行い、8月4日の山岳科学総合研究所運営委員会において各賞の受賞者を以下のように決定いたしました。

「信州フィールド科学賞」(賞状および副賞20万円)

受賞者：小池伸介(東京農工大学大学院農学研究院 助教)

対象となる研究課題：ツキノワグマの長期生態研究および種子散布者としての役割に関する研究

「信州フィールド科学奨励賞Ⅰ種(高校生)」(賞状および副賞10万円)

受賞者：田邊 龍・佐藤啓太(新潟県立白根高等学校)

対象論文：モバイル GIS による商店街の変容の解析—新潟市白根地区を事例として—

「信州フィールド科学奨励賞Ⅱ種(卒業論文)」(賞状および副賞10万円)

受賞者：阿部洋祐(北海道大学大学院環境科学院地球圏科学専攻修士課程1年)

対象論文：南アルプス三峰岳における最終氷期以降の氷河・周氷河地形発達史と岩石氷河形成過程

2010年3月新潟大学理学部提出卒業論文

11月13日(土)に信州大学理学部C棟大会議室において授賞式及び記念シンポジウムを開催いたします。参加費は無料、申込みも不要です。

10月9日(土)開催 第10回上高地談話会のお知らせ

毎回大変多くの皆様にお集まりいただいております上高地談話会の第10回を開催いたします！

今回はケショウヤナギ特集です。上高地の景観を語るのに欠かすことのできないケショウヤナギについて、生態と地形の観点からご講演をいただきます。皆様のお越しをお待ちしております。

日時：2010年10月9日(土) 14:00~16:30

会場：信州大学理学部C棟2階大会議室

参加費：無料(申込みも不要です。)お気軽にお越しください。

内容：「ケショウヤナギとはどのような植物なのか?—その分布と生態学的特性—」高知大学 石川慎吾

「ケショウヤナギが生まれ、育まれる場所—梓川の洪水による河原の地形変動とケショウヤナギ—」

立正大学 / 信州大学山岳科学総合研究所 島津 弘

表紙の絵：「北穂高岳」本谷橋から

初めて涸沢に行ったのは04年6月、山小屋従業員親睦スキー大会だ。

上高地に働く人たちの親睦を深めてとお客さんの少ないこの時期、平や山小屋から新顔旧顔が集まる。夜は大いに盛り上がり翌日は自己申告タイム制のスキー大会、そしてぐるりと居並ぶ峰々を観光にソフトボール大会。グラウンドはスプーンカット状だから人も飛球もイレギュラーな動き、にんげんがいちばん面白い。

山を描くには裏側がどうなっているか見てから、と弟子を諭した絵描きがいた。山通いは笠・双六に終始したので、穂高抜きの稜線を歩くのがやっと。当時は飛騨から信州に抜ける道が限られているうえに県境が職域を分けていたから、山の裏側を知ったのはこれが初めてだった。

何もかもそぎ落とし岩の屏風が衝立としか思えなかった滝谷の裏側に、こんなにふくよかな一面があった。

(中信森林管理署上高地森林事務所 宗亭 正治)

研究所 行事日誌 (2010年7~8月)

- 7月3日(土) 山地水環境教育センター一般公開
- 7月7日(水)~8日(休) 涸沢談話会(第9回上高地談話会)
「小屋番の使命—登山道整備と遭難救助—」
(涸沢ヒュッテ代表・山口 孝)
- 「涸沢の雪が語ること」(山岳科学総合研究所長・鈴木啓助)
- 8月17日(火)~21日(土) 信州大・茨城大合同公開臨湖実習
(山地水環境教育センター)

山岳科学総合研究所ニュースレター 第22号

発行日：2010年9月7日

発行責任者：鈴木啓助

編集・発行：信州大学山岳科学総合研究所 情報企画チーム

〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1

TEL:0263-37-2342 FAX:0263-37-2438

E-mail: suims@shinshu-u.ac.jp

信州大学山岳科学総合研究所

SUIMS

Institute of Mountain Science, Shinshu University

<http://ims.shinshu-u.ac.jp/>

E-mail: suims@shinshu-u.ac.jp

掲載されている内容全ての無断転載を禁じます。著作権は著者及び信州大学山岳科学総合研究所に帰属します。